

忠度最期

薩摩守忠度は、一の谷の西の手の大將軍にてあはしけるが、紺地の錦の直垂に黒糸緘の鎧着て、黒き馬のふとうたくましきに、沃懸地の鞍おいて乗り給へり。其勢百騎ばかりがなかに打ちかこまれて、いとさわがず、ひかえひかえ落ち給ふを、猪俣党に岡部六野忠純、大將軍と目をかけ、鞭鐙をあはせて追ッ付き奉り、「抑いかなる人で在るまし候ぞ。名のら給へ」と申しければ、「是はみかたぞ」とてふりあおぎ給へる内甲より見いたりければ、かね黒なり。あッぱれみかたにはかねつけたる人はいないものを。

〔現代語訳〕

薩摩守忠度は、一の谷の西の手の大將軍でいらっしやったが、紺地の錦の直垂に黒糸緘の鎧を着て、黒い馬の太くたくましいのに沃懸地の鞍を置いてお乗りになった。その兵百騎ばかりの中に打ち囲まれて少しも騒がず馬を止めては戦い、止めては戦いながら落ちて行かれるのを、猪俣党の岡部六野忠純が大將軍だと目をつけて、鞭と鐙とをあわせ馬を急がせて追いつき申し、「そもそもどういう人でいらっしやいますか。お名のりください」と申すと、「自分は味方だ」といって振り仰がれた内兜からのぞき込むと、齒を黒く染めている。ああ、味方には黒く染めている人はいないのに。

◆平忠度

平忠盛の子。清盛とは異母弟。歌人としても優れた。一ノ谷の戦いで11歳のとき討死した。この段では、忠度が一ノ谷で討死をした場面を描いている。

維盛都落

平家の侍越中次郎兵衛盛嗣、是を承ッておひとどめ参らせむと頻りにすすみけるが、人々に制せられてとどまりけり。

小松三位中将維盛は、日比よりおぼしまうけられたりけれども、さしあたってはかなしかりけり。北の方と申すは、故中御門新大納言成親卿の御娘なり。桃顔露にほころび、紅粉眼に媚をなし、柳髪風に乱るるよそほひ、又人あるべしとも見え給はず。

◆平維盛

平重盛の子で、清盛の孫にあたる。那智の沖で入水。

この段では、維盛の妻子との別れを描いている。

「現代語訳」

平家の侍の越中次郎兵衛盛嗣は、摂政殿の引き返されたのを聞き、追ってお止めしようとしきりに気負い立ったが、人々に制せられて思いとどまった。

小松三位中将維盛は、以前からやがて都を離れ、妻子と別れなければならぬと覚悟しておられたが、いざとなると悲しかった。北の方と申す人は故中御門新大納言成親卿の御娘である。桃の花が露に濡れて咲き出したようなお顔、紅粉をつけた頬とあでやかなまなざし、風に吹かれる柳のような髪といった様子は、他にこれほどの人はあろうかとも思われない。

敦盛最期

いくさやぶれにければ、熊谷次郎直実、「平家の君達たすけ舟に乗らんと、汀の方へぞおち給ふらむ。あッぱれ、よからう大將軍にくまばや」とて、磯の方へあゆまするところに、練貫に鶴ぬうたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、鍬形うツたる甲の緒しめ、こがねづくりの太刀をはき、切斑の矢負ひ、滋藤の弓もツて、連銭葦毛なる馬に黄覆輪の鞍おいて乗ツたる武者一騎、沖なる舟に目をかけて、海へぎッうちいれ、五六段ばかりおよがせたるを、熊谷、「あはれ大將軍とこそ見参させ候へ。まさなうも敵にうしろを見せさせ給ふものかな。かへさせ給へと扇をあげてまねきければ、招かれてとツてかへす。

【現代語訳】

平家が合戦に負けたので、熊谷次郎直実は、「平家の公達が助け船に乗ろうと、波打際の方へ逃げられるだろう。ああ、身分の高い大將軍出会って取り組みたいものだ」と思って、磯の方へ馬を進めているところに、練貫に鶴ぬをした直垂に、萌葱匂の鎧を着て、鍬形を打った甲の緒を締め、黄金作りの太刀をさし、切斑の矢を負い、滋藤の弓を持って、連銭葦毛の馬に金覆輪の鞍を置いて乗った武者一騎が、沖の船を目がけて、海にぎぎっと馬を乗り入れ、五、六段ほど泳がせているのを、熊谷が、「そこにいられるのは大將軍とお見受けします。卑怯にも敵に後ろをお見せになるものですな。お戻りなさい」と扇を上げて招くと、招かれて引き返す。

◆平敦盛

平清盛の弟、経盛の子。笛の名手だった。一ノ谷の戦いで討死した。この段では、敦盛の討死の場面を描いている。

先帝身投

源氏の兵者共、すでに平家の舟に乗りうつりければ、水手梶取ども、射ころされ、きりころされて、舟をなほすに及ばず、舟そこにははれふしにけり。新中納言知盛卿、少舟に乗って御所の御舟に参り、「世のなかは今ほかうと見えて候。見苦しからん物共、みな海にいれさせ給へ」とて、艫舳にはしりまはり、掃いたりのごうたり、塵拾ひ、手づから掃除せられけり。女房達、「中納言殿、いくさはいかにやいかに」と口々に問ひ給へば、「めづらしきあづま男をこそ御覧ぜられ候はんずらめ」とて、からからとわらひ給へば、「なんでうのただいまのたはぶれぞや」とて、声々にをめきさげび給ひけり。

◆二位殿

平時子。清盛との間に、宗盛、知盛、徳子（建礼門院）、重衡らを生む。壇ノ浦の戦いで入水し自害した。

この段では、壇ノ浦の戦いで二位殿と幼い知盛が入水する場面。源氏に大敗し、もはやこれまでとなった平家の人々を描いている。

「現代語訳」

源氏の軍兵どもは、もはや平家の船に次々に乗り移ったので、船頭・水夫どもは、射殺されたり斬り殺されたりして、船を正しい方向に向け直すことができず、船底に倒れ伏していた。新中納言知盛卿は小船に乗って御座所のある御船に参り、「世の中は今これまでと見えました。見苦しいような物などを、みんな海の中へお投げ入れください」といって、拭いたり、塵を拾って、自分の手で掃除なさった。女房たちは、「中納言殿、戦いはどうですか、どうです」と口々にお尋ねになると、「珍しい東男をご覧になることでしょうか」といって、からからと笑われるので、「こんなにさしせまった今となって、なんという冗談です」といって、口々に大でわめき叫ばれた。